

べったら市と寺社 2015年10月19日



夕方 6 時前にはすっかり辺りが暗くなってしまおうようになったにも関わらず、雲一つない晴天に恵まれたこの日、私は、東京メトロ日比谷線小伝馬町駅と総武本線新日本橋駅の丁度真ん中くらいに位置する日本橋本町の宝田恵比寿神社周辺で行われる「べったら市」へ向かった。しかし向かったのはお昼前、まだ準備中のお店が多かったので、小伝馬町駅で降りてすぐの江戸三十三観音霊場五番札所・高野山真言宗大安楽寺(左写真)へ先に足を運んだ。ちなみに、江戸三十三観音霊場一番札所は浅草寺、拙文「東京遊歩：両国」にてご紹介させて頂いた両国回向院は四番札所だそうである。

ある。



さて、こちらの大安楽寺は、一風変わった歴史をもつお寺である。寺自体は明治 15 年(1882)年に建立されたのであるが、慶長 18 年(1613 年)から明治 8 年(1875 年)に市ヶ谷に監獄が移設されるに至るまで、この大安楽寺周辺地域には江戸の監獄・処刑場の一つ「傳馬町牢屋敷」が存在した。牢屋敷はこちらの大安楽寺と、隣接する十思公園を含む 2618 坪(約 8654 m²)もの巨大な敷地を有しており、旗本、僧侶、平民、百姓、そして女性と様々な身分に応じて分けられて人々が収容されていたという。拷問や処刑もこの地で行われていた。



左斜め上の写真は、「石町 時の鐘」である。元々は江戸時代 2 代将軍徳川秀忠の頃に造られたが、火災にて破損後、宝永 8 年(1711 年)に、再建、昭和 5 年(1930 年)まで本石町三丁目(現在の本町四丁目・室町四丁目の一部)に置かれていた。この「時の鐘」は時刻を知らせるという役割はもちろん、処刑時にも、合図として鳴らされていたそうだ。また写真をご覧頂くと螺旋階段があるのがおわかりになるかと思うが、私は上って鳴らせるのかな、と思ったが階段の入り口には鍵が掛けられており、その願いは叶わなかった。

その後、牢屋敷がこの地から廃止され、明治 15 年に至るまでの 7 年間は、跡地に住む人がおらず、荒れに荒れていたそうである。しかし明治 15 年に、大倉喜八郎氏と安田善次郎氏の寄進によりこの大安楽寺は造られた。彼らの頭文字を本寺院名の「大安楽寺」にも入れたようである。余談ではあるが、大倉氏は大倉財閥を創設し、大成建設や帝国ホテル、サッポロビールを創立、安田氏は日本橋小舟町にて両替商を開業、その後安田財閥を創設した。ちなみに、オノヨーコは彼の孫だそうだ。

この「傳馬町牢屋敷」に収容され処刑された数多くの人々の中で、著名な人物として挙げられるのが、松下村塾を創り、安政の大獄にて死罪となった、吉田松陰(1830-1859)であろう。十思公園にも「松陰先生終焉之地」の碑が築かれている。また彼の辞世の句「身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ぬとも 留置まし 大和魂」と刻まれた碑も隣に置かれており、幕末の人々が当時取った行動や持った思想に思いを馳せることができる。

大安楽寺の西隣には「見延別院(右写真)」が建てられている。こちらは名前からもわかるように、日蓮宗見延山久遠寺の別院であり、「傳馬町牢屋敷」で処刑・命を落とした人々の慰霊のために大安楽寺の翌年明治 16 年(1883 年)に建立された。その後、大正 15 年(1923 年)の関東大震災で元来建てられた見延別院は焼失してしまったものの、昭和 4 年に再建された。

このような歴史のある一帯ではあるが、私が行った時にはサラリーマン数人が十思公園のベンチに座って休憩しており、また近くの幼稚園の子どもたちが保育士さんと遊具で遊んだり散歩していたり、というように、そんな歴史を一見感じさせない雰囲気を受けた。



大安楽寺を後にし、そろそろお昼時となったので、江戸通りを挟んで向かいを見た。すると、「べったら市」の設営がほぼほぼ終わっており、人が集まりつつあったのがわかったので、早速私はべったら市へ向かった。まだ完全に準備は終わってはいなかったものの、べったら市に足を踏み入ると人・人・人ばかりであった。初めて行くお祭りで、勝手がよくわからなかった私は、気の趣くままに、足を動かした。子どもの頃に行った、田んぼや小さな家々に囲まれた神社やお寺、広場で経験した夏祭りや秋祭りが、こんな都会の街中で行われていることに少しカルチャーショックを感じたものの、露店自体はよくみるから揚げだったり、お好み焼きだったり、ベビーカステラだったり、じゃがバターだったり、チョコバナナだったり…というオーソドックスな露店が多かった。しかし、お酒であったり、お酒の当てに丁度良い焼き鳥であったり、カニ味噌焼きであったり、鳥皮焼きであったりも売られており、夜来たら間違いなく一杯引っかけていたであろう露店もあった。珍しい露店では、長野県のおやきを売っている露店もあった。また、金物屋が出店していたり、明治屋が出張して青空市場を開いていたりと、「べったら市」、の名前についているべったらを忘れてしまいそうなほど、バラエティに富んだ露店が多かった。正午ごろに訪れたので、近隣のオフィスからお昼を買いがてら来たと思われる人々も多かった。

たくさんの露店を抜け、べったらが売られている露店通りに出た。





前頁最後に掲載した2枚の写真をご覧頂いてもわかるように、「べったら市」の名の通り、本当にたくさんの美味しそうなべったらが並べられていた。どの露店でもべったらを試食でき、私も頂いてみた。上京してきて早10年近くになるものの、初めて食べたこの味は、大根のほど良い硬さとべったらべったらの麴と砂糖の甘さが丁度よくミックスされ、とても美味しく頂けた。漬物はご飯と頂くもの、と私は思い込んでいたが、べったらはそれ単体で食べられる程味がついていた。しかし、べったらは一本単位で売られていたため、単身者向けに半分だけ、など少なめの量を購入することができると私みたいな者にも買いやすいかな、と感じた。ただそんな小分け売りが目に入ってしまうと酒のつまみについつい多めに買ってしまいそうではあるが…。

そんなべったらであるが、大根以外のものを使ったものも売られていた。上写真の見事な濃い紅色の赤蕪を使ったべったらもあり、これも試食させて頂いたがコリコリとした食感で美味しかった。

そもそも「べったら市」の「べったら」とは何なのであろうか。べったら市の別名、というか正式名称は「たからだ寶田恵比寿神社大祭」というので、恵比寿という神様の名前からわかる通り、商売繁盛の神様が祀られている神社である。

この地域周辺は江戸時代初め、徳川家康が、彼に関係する駿河、伊勢等の国々から商人を呼び集めて住ませたため、江戸の商売が発展していった地域である。そして恵比寿様を祀る神社を持つこの地域では、いつしか正月を迎える前に、季節の大切な祭としてこの大祭が始まった。そこで、江戸の名産であったべったら漬べったら(当時は詳細不明であるが別名で呼ばれていた)も売られていたのだが、この独特な粘りを持つべったら漬を「べったらだーべったらだー」と言いながら婦人の着物の袖につける等してからかっていた不届き者がいて、そこからべったら漬、そしてこの大祭が「べったら市」と呼ばれるようになっていったという。いつの時代もそんな輩がいるのだなあと思ったが、そんな行為が祭や漬物の呼称となり現代に続いているのは面白い。

そしてこの寶田恵比寿神社(神社自体は日本橋本町にある)周辺の大伝馬町・小伝馬町には、上記の商人たちに加え、幕府の人員輸送や物資運送等を監督する「伝馬役」の人々が江戸城内から1606(慶長11年)年頃にこの地に移転させられ住むようになった。それが町名の由来となっている。ちなみに現在の「大」伝馬町には五街道向け、「小」伝馬町には江戸内部向けの伝馬役が居住していたようだ。また、現在の京橋一丁目～三丁目の一部は、「南伝馬町」という町名だったそうである。また、東京の大伝馬町・小伝馬町以外にも全国、特に静岡市や名古屋市に伝馬のつく地名がある。

また寶田神社の前には、右写真の御神輿も置かれており、担がれるのを



今か今かと待っているようだった。残念ながら、練り歩きは午後 4 時からということで今回は見られなかったが、細部まで作り込まれた御神輿は見事だった。

寶田神社を見て、再度露店を巡っていると、次は別の神社に行きついた。白の鳥居と薄い空色の屋根を持つ拝殿、神楽殿(下写真右)が印象的な^{すまのもり}梶森神社である。



この梶森神社の歴史は古い。関東大震災の影響で昭和 6 年に鉄筋コンクリート造りで再建されたが、神社自体の歴史はなんと、平安時代の 931 年(承平元年)頃に始まったそうだ。こんな都会の片隅に、こんなに歴史の長い神社があるのは驚きである。940 年頃には平将門の乱を平定した藤原秀郷が戦勝を祈願したり、また 1457 年に江戸城を築いた武将太田道灌が、1466(文正元年)年に雨乞いのため京都の伏見稻荷^{かみじょう}を勧請したりと、歴史上の著名な人物や出来事に何かと由来のある神社となっている。

しかし梶森神社は私のような庶民にとっても、身近なポイントがある。それは拝殿左側にある「富塚」である。梶森神社は、江戸時代に入ると、寶田恵比寿神社と同様、恵比寿様を祀るようになった。そして、新橋の同じく藤原秀郷が戦勝祈願をしたと伝えられる烏森神社、太田道灌が 1457(長禄 2 年)年に江戸城の鬼門除けとしてたくさんの柳とともに前述の伏見稻荷^{かみじょう}を勧請し、建立した神田須田町の柳森神社とともに江戸三森と称されるようになり、人気の神社となっていった。そのため、人の集まる神社にて他の神社等が火災等で焼失した際の再建費用を捻出するために行われ始めた富くじが、ここ梶森神社においても、催されるようになった。そんな富くじにまつわ



る庶民の心を記念して、大正 9 年にこの富塚が建立されたという。関東大震災により前富塚は倒壊してしまっていたが、昭和 28 年に左の写真の現在の富塚に再建された。現在では、宝くじの元祖として、宝くじで一攫千金を目指す人が参拝している。私もあやかりたい。そして、寶田神社の前で見た御神輿より一回り大きい神輿をこちら梶森神社でも見かけた。こちらの御神輿も金色の装飾が眩しい程だった。

その後、また露店を少し巡り帰路へ着いた。帰りながら考え、そして感心したことは、先日少しだけご紹介させて頂いた人形町を

含め、この日本橋界隈は歴史がとても深いということ、そしてそれが文章や伝承で残り、しっかりと現代まで生き続けている、ということである。今後も日本橋の街や歴史をゆっくりと、しかししっかりと歩きながら、見て行きたいと思う。

進藤竜一

小伝馬町周辺簡略図

